

日本(人)論の決定版としての『日本文化の核心』への補填(前編)

農食健康研究所
株医工学研究所
(株)人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

(まえがき)

実に多くの日本(人)論が

書かれてきたが

私の書棚には、日本(人)論に関する著作が、200〜300冊ある。その中で松岡正剛著の『日本文化の核心』という本は、最も日本(人)を鋭く全体として捉え、この国の深い魅力^レを真に捉えた秀逸な著作であると思う。

著者自身が語る如く、「生物に学

び、歴史をいただき、文化を遊ぶ」をスローガンとした編集工学という手法で、ジャパンフィルタといういくつかのキーワードを用いて、日本文化の本質を見事に描き出している本である。

おそらく、この本の著者の松岡正剛氏は、昔から多くの日本(人)の研究者の著作を数知れず読み切り、それを更に編集する形で纏めたものであろう。何よりも松岡正剛氏の読破した本の多さに驚くと共に、その立場に感動する。何故なら日本(人)

論を展開していく上で、重要な事は、読者におもねる形で出来る限り判り易く著そうと意図した日本(人)論も多いが、それでは日本(人)論の本質に接近するには不十分で、「日本文化はハイコンテキストで、一見判り難いと思える文化表現に真髓があるのです」と序で語っているからである。その指摘には私も全く同感である。但し、著者のみの責任ではなく、「やさしさ」を求める読者と、それを好んで要求する編集者にもその責任はある。

やはり日本(人)論を展開し、その本質を見抜き、描く努力をしようとする一筋縄ではいかないところがある。目に見えない隠された部分^レがひっそりとその背後に控えている事が多いのである。あたかも、日本神話における「造化三神」が最初にちよつと現れて、直ぐに背後に消えてしまっている如く、見えない世界や背後の微妙な陰影が日本文化の特色の1つなのである。そうしたニュアンスを含めて松岡正剛氏は『日本文化の核心』を彼なりの独自の立場

から著している素晴らしい力作である。

私は大方『日本文化の核心』の論は、この著作の中で完成に近づいているものと思う。しかし長年自然科学者として日本研究をしてきた私の立場からすると、『日本文化の核心』が形成された背景として、日本の自然そのものが深く関わっている点を編集の中に、もう少し詳しく触れ、一講入れて欲しかったとの印象が残るのである。それ故に、その点を少しここで付記させていただくにする。但し同氏の知識量から言えば、この本の中に編集していないだけで、きっとここでの私の述べる事も理解されている事であろう。

1 何の為に「日本(人)論」をいま改めて取り上げるのか？

ところで何の為に日本(人)論を改めてここで取り上げるのかの意図をここで話しておこう。

極めてハイコンテキストの『日本文化の核心』の素晴らしさは、かつて日本文化(精神)を海外の人々に理解してもらうために書かれた次

の書にも各々の立場から触れられ、各々の著作が日本(人)論を海外の人々に知らしめるのに一役買っている。そして今もその内容は殆どが通じるであろう。ここで取り上げた『日本文化の核心』は、これらの著作と比しても、それらの内容を踏まえた上で、より体系的に日本文化を編集し直し、核心をついた著作になっていると私は判断するのである。日本(人)論の啓蒙普及書としてはより完成度の高い本と言えるだろう。

- 『禪と日本文化』…鈴木大拙
- 『茶の本』…岡倉天心
- 『代表的日本人』…内村鑑三
- 『武士道』…新渡戸稲造
- 『菊と刀』…ルース・ベネディクト
- 『日本の思想』…丸山眞男
- 『風土』…和辻哲郎
- 『縮み』志向の日本人』…李御寧
- etc.

さて今日という時代は、これらの著作と、ここで紹介している『日本文化の核心』をひとりひとりの日本人が読み、理解し、日本(人)論の語り部として育っていく事が極

めて日本にとっても、世界にとっても大事になってきている時代なのである。何故なら、ジェレミー・リフキン著『レジリエンスの時代』が警告している如く、この地球上での人類の生存は、とてもSDGs(Sustainable Development Goals)どころの対応では対応し切れない程の厳しい環境破壊を目の前に招いてしまっているからである。それ故、地球上での人類の未来社会についてより厳しい思索を練り、解決策を得ねばならない。この立場と内容に納得する人々は少ないであろう。何故なら、物質的豊かさ、利便性を未だ他者との比較の上で、主体的判断無くして、無思慮に追い求めているからである。

そうした中でも、世界中の真に鋭い感性の持ち主は、理性、知性の捉える世界認識とそこから組み立てられた論理や知見のみでの対応では、

これから訪れる、狂暴化していく地球(Rewilding Earth)の振る舞いに人類は対応し切れず、破滅の道を辿るかも知れないとの危機感を宿し始めている。いや多くは既にそうした理解を持ち、警告を発している。

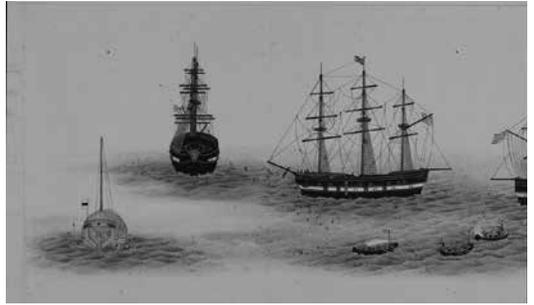
そうした状況に陥る中で、将来を憂う世界の人々の視界の中に「日本」という国の歴史、伝統、文化等々の中に、未来の望ましい世界の姿のヒントがあるのではないかと考え始



ジェレミー・リフキン著 『レジリエンスの時代』



松岡正剛著 『日本文化の核心』



ペリーの黒船来航の前に、
日本には3つの黒船来航があった

いだらうと思える。

しているものと考えられる。その為にも、日本人自身が日本(人)論を先ずきちんと理解し、世界の人々への語り部になれる事が大切なのである。それ故、本稿で改めて日本(人)論の大切さを取り上げている訳である。その為にも『日本文化の核心』は最適の指南書である。

2 『日本文化の核心』の内容

ここでは松岡正剛著の『日本文化の核心』のジャパンフィルターを、目次をお借りして示しておこう。全部で第十六講である。本稿の意図は、第十七講を付加させていただく形の作業である事を理解しておいていただきたい。

- 第一講…柱を立てる
- 第二講…和漢の境をまたぐ
- 第三講…イノリとミノリ
- 第四講…神と仏の習合
- 第五講…和する／荒ぶる
- 第六講…漂泊と辺境
- 第七講…型、間、拍子
- 第八講…小さきもの
- 第九講…まねび／まなび
- 第十講…或るおおもと
- 第十一講…かぶいて候
- 第十二講…市と庭
- 第十三講…なりふりかまう
- 第十四講…ニュースとお笑い
- 第十五講…経世済民
- 第十六講…面影を編集する

この十六講の中に松岡正剛氏の日本文化の核心を編集する為に、彼の編集の元となった数多くの情報、知識が、十分過ぎる程に消化された上で、珠玉の言葉の選択として纏められている。氏がその中で是非読んでおく事を進めている著作を読むだけでも大変な努力を必要とする。松岡正剛氏の著の『日本文化の核心』を十分に理解するには松岡正剛氏以上に背景としての教養を磨かねば難しい

しかし、それは難しいと言うよりは、不可能に近いであろう。とすればこの著作をどう利用させて頂く事が考えられるだろうか？私はその内容に関しての反論は、全く必要ないと思うので、次の点を付け加えて、より深く核心に接近していけるのではと思つたので、本稿を印した。

十六講で語られた事全体が、そもそもこの「日本という空間の状態や条件」の中で、どのように生じたのか？その必要十分条件とは何であったかを付記する事。

第2は、「今日の世界の厳しい状況の到来の中で、日本と世界の関わり方はどうであったのか？もう少し裏の裏まで立ち入る事が必要なのか、どうか？」に関して付記する事。

以上2点を私なりの見解として本論で加えたいと思う。

3 日本の自然の豊饒さ

松岡正剛氏は、1853年のペリーの黒船の来航の前に、日本には3つの黒船「稲作、鉄、漢字」の来航が、日本海を超えて大陸からあり、日本文化の核心を育んだと捉えた。その点に関しては、私も異論は無い。そしてそれらはいずれも、木村正三郎氏が「日本文化の男時、女時」論で指摘した如く、男の時代に入ってきた文化を、女の時代に日本的に見事に発酵させて、消化吸収し「和魂漢才」の如くに、日本独自のものとして血肉と化したと指摘している如くに松岡正剛氏も同書の中で説明し

ている。

他方、注目すべき論点は次の如くである。残念な事に明治維新と、その後の西洋科学技術文明の導入を促した1853年のペリーの黒船の来港による開国は、全く事情がそれまでの日本の海外からの影響の取入れパターンと異なり、独自の工夫をして日本化する努力が欠如していると指摘している。それはお米の苗代を作り、日本化する形で、お米の導入を図ったケースと違い、全く発酵させる事無く、そのままストレートに取り込み、消化不良を一部で生じ、十分に日本にとって、真に発酵消化された望ましいモノになっていないだけでなく、それまでの『日本文化の核心』を侵蝕する部分もあったと指摘する。まさにその指摘の如くである。その事が、その後の日本文化の質をどれ程妨げ、質を劣化させたか計り知れないものがある。

さて私が、ここで付記したのは、松岡正剛氏が3つの黒船と語る「稲作、鉄、漢字」がどうして日本的に輸入されてから、途切れることなく、消化吸収され、日本文化の核心を形成する事が可能となったかについて

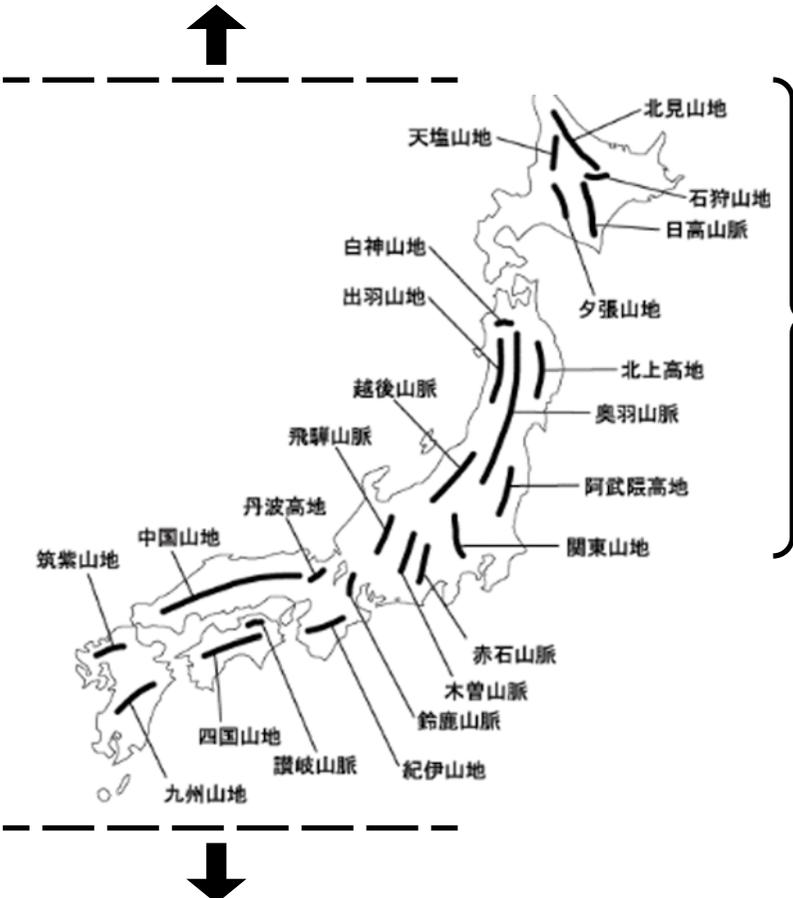
の考察である。どのように外来のモノが日本の土壌の中で、発酵し得たのかのメカニズムを知る事である。私は、それは日本の自然の豊饒さに原因があつたと捉えている。それは

この日本列島に生活してきたひとりひとりの日本人が日本の環境の与える厳しい淘汰圧に巧みに適応し、その環境の中で巧みに生存を成功裡に確保してくる中で、培われた能力に

よると説明出来るのである。最初に日本の自然の豊饒さと凶暴さについて見てみよう。これに関しては日本人が高校まで習う知識の下の地があれば十分である。

温带

北海道、東北地方 亜寒帯



南西諸島 亜熱帯

図1

351

アジア大陸の東端から離れて、太平洋上に在民する南北に伸びた弧状の火山列島

日本は、北緯20度から45度、東経120度から150度に存在する南北に細長い弧状の列島である。大小約1万4125の島々を有し、その海の岸線は、約3万5000kmと世界第6位で、そこには全世界の海洋生物の35%が生棲している豊かな海洋生態系を有している。

何よりも、四方を海に囲まれ天然の要塞と称される如く、国境を他国と直接接していないめずらしい国である。そして多くの山が、活火山か、休眠山の形であり、列島の背骨としてアルプス等の山脈が連なっており、多くは、その昔、海の底で有機物が堆積して出来た堆積岩が、地殻変動により、隆起したり、部分的に沈降して出来た栄養分豊富なものである。

その為に隆起した堆積岩から出来た土壌には、土壌菌を養う為に必要なミネラル成分等々、様々な生命体

に必要な栄養分を豊富に含んだ土壌となっている。

それが故に、多くの種類の動植物が、豊かな生態系を多様に形成して生棲している。

また地下には、4つのプレート(北米プレート、ユーラシアプレート、太平洋プレート、フィリピン海プレート)がせめぎ合いをする形で存在し、世界一の地震大国として、地震を多発させ、甚大な被害を蒙らせている。そして中央にフォッサマグナと呼ばれる断層地帯が存在し、国土を南北に二分する形で存在している。しかしこの周辺は極めて磁場の条件が良いと共に、多様な温泉が噴出し、利用されている。

352

偏西風に支配された

高温多湿で

極めて変化に富んだ気象条件

そうした日本列島の置かれた世界地図上での位置は、日本の気象現象に極めて多彩な状態を与えている。何よりも気象学的には亜熱帯(沖縄諸島)から亜寒帯(北海道)までに

国土は広がり、更に中央の3000メートル級の山々は、日本海側と太平洋側とで気象条件を大きく分け、偏西風の影響が、その両者で大きく異なっている。また海に囲まれてい

る事もあり、水蒸気の蒸発も活発で、年間の降雨量はヨーロッパ平均の700~800mmに対し、1800mm前後と2倍半もの降雨量があり、札幌~ミュンヘン~ミルウォーキー

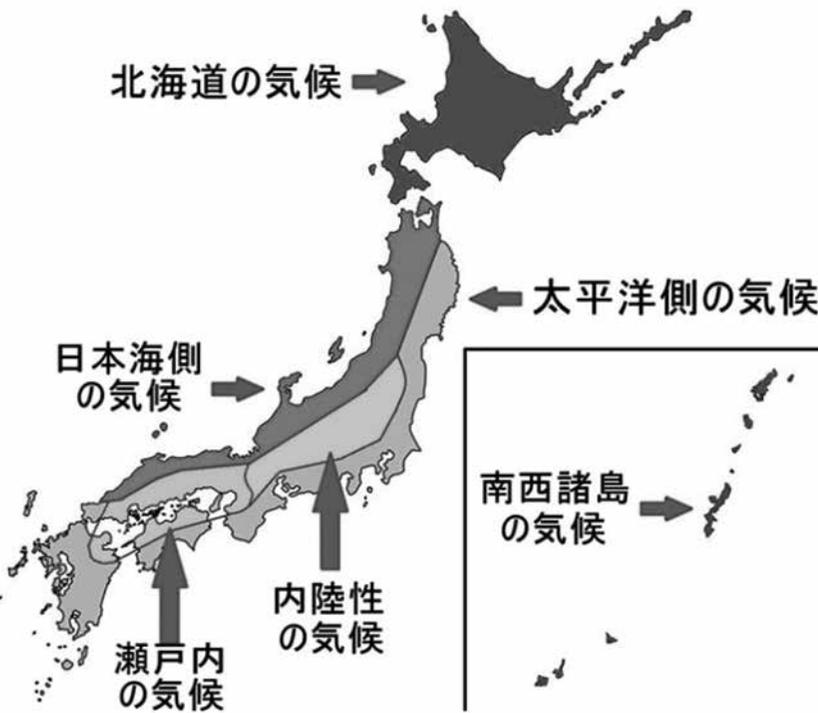


図2 日本全体の気候区分

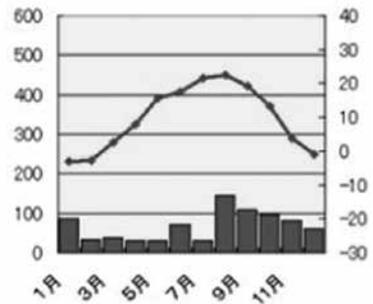
と、ビールの生産地で名高い3つの地域が同緯度である事から判る如く、日本列島は、欧州と比べると温かい地域であり、南へ行くと暑い位の場所となる。雨と共に、雪も日本各地で降り、これは日本の地下水にとって貴重な源となっている。

そして何よりも3ヵ月ごとに規則正しく訪れる春夏秋冬の四季である。更にその安定した四季の中での気象変化は、極めて変化に富み、活発で多様である。この事が日本列島での自然現象の多用さを生み出し、日本人の精神と文化を多彩なものにしている原因の1つとなっている。

**3-3
この日本の地形と
気象条件の作り出す
多様で豊かな自然**

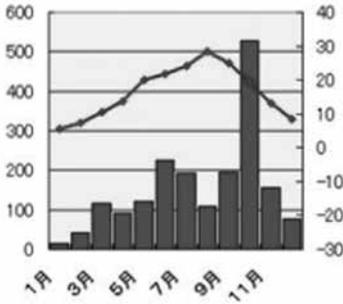
この南北に長く伸びた地形と中央に山脈を背景として存在し、東西南北を分断している空間地域の存在と偏西風下での気象条件は、この日本列島の上に、実に多くの自然現象や多くの生命を豊饒に育む条件を生み出している。

北海道の気候



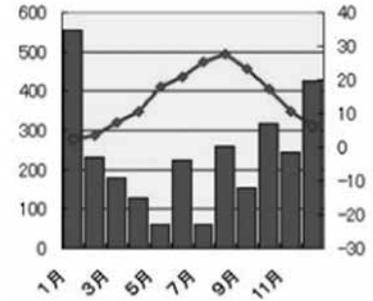
○北海道の気候
夏が短く、冬が長い。
雨が少ない

太平洋側の気候



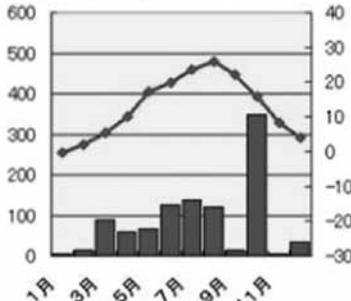
○太平洋側の気候
梅雨や台風の影響で夏に雨が多く、冬は晴天が多い

日本海側の気候



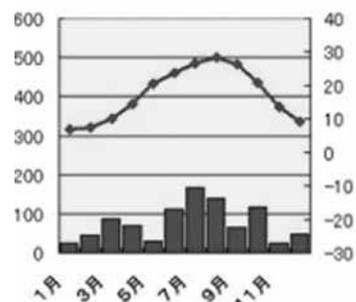
○日本海側の気候
冬は雪が降るので降水量が多い
気温は低め

内陸性の気候



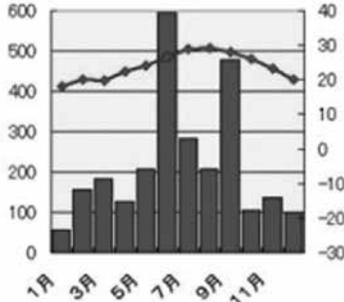
○内陸性の気候
夏と冬の気温差が大きい
1年を通して降水量が少ない

瀬戸内の気候



○瀬戸内の気候
1年を通して降水量は少なめ
温暖

南西諸島の気候



○南西諸島の気候
亜熱帯気候。1年を通して気温が高い。
夏場に降水量が多い

(次号へ続く)